

二〇二六年度 学力検査

「現代の国語、言語文化（古文・漢文を除く）」

<input type="checkbox"/> 問 9	記述式
<input type="checkbox"/> ～ <input type="checkbox"/> 問 8	マーク式 解答番号 <input type="checkbox"/> 1 ～ <input type="checkbox"/> 26

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もし人間の進化自体、かなりの部分がダーウィンも指摘した自己家畜化^(注1)だったとするなら、遺伝的強化は各個人の意思で、それぞれの価値観に従って遺伝形質の選択をするという点で、自己家畜化と本質は変わらず、ただ効率を高めるだけの違いだ、という意見もある。確かに家畜——犬猫と共通の特徴である顔かたちや表情の親しみやすさは、人間の場合もそれに関係する遺伝子が存在し、それに選択がかかってきたことが知られている。

だが、この自由のための遺伝的強化は、知見の不足、実現性、身体への危険性以外に、様々な角度から批判を受けている。たとえば、⁽¹⁾ベイトソン親子がそうであったように、親子の価値観はしばしば対立する、従って子の遺伝的強化は、逆に子の自由を奪うという批判もその一つだ。親は子の将来の自律性と自己実現をホシヨウすべきであり、少なくとも意図的に制約すべきではないとする考えは、「開かれた未来への権利」と呼ばれるが、強化はこの権利を守るためのものとされる一方、逆に侵害する、という主張がある。また、強化するのに必要な資金力の有無と、商業主義により、富裕で能力を強化されたエリート階級が出現し、社会格差が遺伝的に固定する、という批判もある。

恐らく最も本質的な批判は、その目的は優生学^(注2)ではないが、結果は優生学とほとんど変わらない、というものである。集団と個人は独立した存在ではないからである。例えば多くの人が一つの価値観に沿って遺伝子を改変するなら、それが個人の意思と選択によるものでも、行為だけ見れば優生学とほぼ同じになる。孫世代以降の幸・不幸まで心配し始めた場合も、必然的に優生学に近づく。そのため、こうした遺伝的強化を、否定的にも肯定的にも、新しい優生学（またはリベラル優生学）、と呼ぶ研究者もいる。

また優生学が社会と個人の利害対立を引き起こすように、個人のための遺伝的強化も、社会の利益との対立を引き起こす。例えば、親が特定の感染症への遺伝的な抵抗性を子に付与したとする。当初は感染症の患者が減り、医療費のサクゲン^(a)につながり、

行政にも歓迎されるだろう。しかしある程度、抵抗性を与えられた人々が増えると、その抵抗性を回避する病原体の進化が起りやすくなるかもしれない。病気のタイセイ遺伝子を導入した農作物を、大量に栽培した場合に危惧されるのと同じことが起きるのだ。その結果、遺伝的に強化された個人の増加で、社会的な不利益が発生する。この場合、行政や科学者が遺伝子プールに介入するまで、つまり優生学が始まり人権が損なわれるまでは、ほんの一步である。

一次財を増強する遺伝的改変なら許されると説き、遺伝的強化に倫理的な基礎を与えたロールズは、「ある者の自由が失われても、それは他者が共有するもつと大きな善によってホショウされるという考えを、正義は否定する」と優生学の功利主義的要素を批判したが、一方で次のように述べている。「当事者は自分の子孫に最高の遺伝的素養をホショウしたい」「社会は少なくとも、自然な能力のレベルを維持し、深刻な欠陥の拡散を防ぐソチを講じなければならない」。ロールズ思想は、優生学の対極に位置するにもかかわらず、この主張は極めて優生学的である。左に傾きすぎた左翼は、極右とほとんど区別がつかなくなるように、何らかの価値観にあわせて個人を「改善」する遺伝的強化は、集団を「改善」する優生学に接近せざるを得ない。それが仮に一次財でも同じである。

生殖細胞系列の遺伝子改変を伴う遺伝性疾患の治療や遺伝的強化は、実質的に人間の遺伝子プールを人為的に改変する以上、事実上の優生学である、という指摘もある。現代では、出生前診断の結果で中絶という判断を下す場合がある。着床前遺伝子診断による胚の選択や、卵子・精子提供者の選択も行われている。これも事実上すでに遺伝子プールから特定の遺伝的変異を人為的に排除、選択していると言える。しかし個人の意思による個人のたための選択は、遺伝性疾患の治療も遺伝的強化と同じく、過去の優生学とは区別される。

ア、あらゆる点で、容易にそちらに転化しうる大きなリスクを抱えている、というわけだ。過去の優生学運動がそうであったように、個人の自由と平等の追求者は、容易に個人の犠牲と差別を強いるようになるという教訓を忘れてはならない。

恐らく近い将来、トランスヒューマニズムは少なくとも部分的には実現するだろう。「長い目で見て何が起きるかわからないか

らという理由で、こうした実験が長く先延ばしにされてきたことはない」からである。だが私には、それは情報工学や新素材、ナノテクノロジー、生体・機械工学など、生殖細胞系列の遺伝的改変以外の技術、つまり体細胞の遺伝的改変を含む一世代限りの可逆的な方法で進められたほうがよいと考える。仮に技術的に可能になったとしても、倫理的な問題がないとしても、である。重篤な遺伝疾患の治療目的の改変や、着床前遺伝子診断による胚の選択や精子・卵子ドナーの選択は、それが個人の価値観に基づく、個人の選択ならそれを否定するのは難しいだろう。だが、市民の多数が関わりうる、世代を超えた遺伝的強化は個人の選択であつても私には支持しがたい。

境界が曖昧でも、治療と強化の間はどこかに線を引いたほうがよい。次世代に影響しない技術で不平等がコクフクできるなら、そのほうがよいだろう。

2017年にヒト生殖細胞系列のゲノム編集を許容する方針を打ち出したときの米国^(注6) N A S E Mの委員で、生命倫理の専門家ジョン・エヴァンスは、現状のまま生殖細胞系列の遺伝的改変技術の安全性と効力が確立した場合、社会は「^(注7)デイストピアのどん底への転落」を免れないだろう、と述べている。それを防ぐのは、遺伝的最低水準を満たすレベルと社会的優位性を与えるレベルの間——「滑りやすい斜面」の間に、落下を防ぐ防護壁を築くことだという。病気であれ知能であれ、遺伝的特質によって不利な立場に置かれる子供たちを、「^(注8)遺伝的最低水準」と呼ぶ水準に引き上げて、「^(注9)平等な機会」を与えるのを許容する一方で、運または努力で得る以上の社会的優位性を個人に与え、ほかに何ら利益をもたらず、競争の暗黙の目標を損なうような遺伝的強化を阻止するのである。

歯止めを欠いた遺伝的強化の未来がデイストピアである理由として、エヴァンスは遺伝的強化が実質的に優生学である点を挙げている。個人と社会、義務論と功利主義という遺伝的強化と優生学との壁はとうに崩れたというのである。遺伝的強化をめぐる過去の議論や状況の推移も、過去の優生学の歴史——倫理と技術の防護壁が次々と消失し、気づいたときにはナチスの惨劇に向かつて「滑りやすい斜面」を転げ落ちていった歴史と重なるという。悪魔が再び^(注10)蘇るのである。

イ 社会から偏見や差別、能力主義が消える見込みは乏しく、むしろ蔓延まんえんしている状況では、多くの個人の選択の総体として、自滅的な優生学化が進む恐れがある。人々の未来への可能性が遺伝的に閉ざされたカースト社会が実現するかもしれない。これは自由、平等、人権という現在の価値観、道徳観に反する世界である。

だが遺伝的強化を支持できない理由がほかにもある。

現実には、一部の性質を除けば、後天的要素の役割の大きさと遺伝子制御ネットワークの複雑さゆえに、期待通りの遺伝的強化は不可能かもしれない。不可能ならそれでよいが問題なのは、知識に基づいて可能か不可能かを判断すること、さらにリスクを把握することの困難さである。優生学の歴史では、知識より実践が優先され、リスクより利益が重視された。これは現代の様々な科学技術政策で共通に認められる傾向でもある。

体細胞の遺伝子改変なら誤りが起きても、その誤りによる悪影響は患者の死とともに終わるが、生殖細胞系列で起きた誤りの悪影響は、子孫に受け継がれる。それが遺伝子プールに広がれば收拾はほぼ不可能となる。流行に合わせて多くの人々の遺伝的改変が行われる結果、次世代とそれ以降の個人と遺伝子プールに大きく急で、予測と修復が困難な遺伝的变化を不可逆的に生じられるかもしれない。

遺伝的な変異を不可逆的に失い、進化的な可能性が奪われる恐れもある。遺伝的に均一化し脆弱ぜいじやく化した、農作物品種のようになるのだ。いわゆる進化のデッドエンドである。

持続可能性という現在の価値観、道徳観を大事にするのであれば、このように修正が利かない不可逆的な操作——先天的な資質を改変して、個体と社会の性質を急激に大きく変えるような操作、後戻りできない操作、未来の可能性を奪うリスクのある操作は、可能な限り避けたほうがよいだろう。

還元主義からの脱却が難しい生物学者は、人間社会のような高次の系を思い通りに予測し、操作できるなどと考えないほうがよい。ジョン・デュプレが指摘するように、還元主義は複雑な系の振る舞いの説明はできるが、正確な予測はできない。

己の無謬^{むびょう}を信じる者が改革を進めた社会や組織は悪くなる——これが優生学の歴史が語る教訓である。社会や人々の「改善」を願うなら、結局最も人間のかつ平凡な方法で——様々な価値観・立場の人々との対話と合意を経て、方針を決めたら、信頼できる記録やデータ、観察事実をもとに、考え、試し、様子を見て、誤りを正しながら、少しずつ進めるしかない。私たちに必要なのは、大きなプランを進める前に、⁽³⁾ レンガを一つ置いてみることであろう。

〔千葉聡『ダーウィンの呪い』より。出題の都合上、一部中略した箇所がある〕

(注1) 自己家畜化

—— 筆者は同書の別の箇所で、品種改良された犬や猫が人間に対して友好的な性質であるように、人間も人間に対して友好的になるような進化をさせてきた^グとダーウィンが述べていることを紹介している。

(注2) 優生学

—— 人類の遺伝的素質の改善を目的として、劣悪な遺伝形質を淘汰^{とろた}し、優良なものの保存を研究する学問。

(注3) 遺伝子プール

—— 互いに繁殖可能な個体で構成される集団が持つ遺伝子の総体のこと。

(注4) 一次財

—— 社会の基本的な構成要素（基本的権利・自由・機会・資源など）を意味する。

(注5) トランスヒューマニズム

—— 遺伝子操作を含む科学技術を用い、人間の身体と認知能力、ひいては社会を進化・向上させようという思想。

(注6) 米国NASEM

—— 全米アカデミーズ (The National Academies of Sciences, Engineering, and Medicine) の略称。

(注7) デイストピア

—— 反理想的な世界や社会のこと。

問1

傍線部(a)～(d)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4。

(配点8点)

(a) サク|ゲン

1

- ① 部首サクインで漢字をさがす。
- ② 中間サクシユがはなはだしい。
- ③ 様々な思惑がコウサクする。
- ④ 事故防止のホウサクを講じる。
- ⑤ 小論文をテンサクしてもらう。

(b) タイ|セイ

2

- ① 師匠の技をタイトクする。
- ② タイゼンとして敵を迎え撃つ。
- ③ タイキュウレースに出場する。
- ④ タイボウの新作が発表される。
- ⑤ 出張に秘書をタイドウする。

(c) ソ|チ

3

- ① 銃で害獣をソゲキする。
- ② 美しいキヨソに感心する。
- ③ ソゼイの負担に苦しむ。
- ④ 友人と意思のソツウを図る。
- ⑤ 鮭さけが川をソジョウする。

(d) コクフク

4

- ① 被害の状況をコクメイに記す。
- ② 若いころから体をコクシした。
- ③ 急流がケイコクをつくりだす。
- ④ アンコクの時代を乗り越える。
- ⑤ 白米にザツコクを入れて炊く。

問2

傍線部 i・ii の「ホシヨウ」を漢字に直し、i・ii の順に示したものとして最も適当なものを、次の中から選びなさい。
なお、i は二か所あるが同じ漢字である。

解答番号は、5。

(配点4点)

- ① 保証・補償 ② 保証・保障 ③ 保障・補償
- ④ 保障・保証 ⑤ 補償・保証 ⑥ 補償・保障

問3

空欄 ア・イ に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、ア 6、イ 7。

(配点6点)

- ① いわんや ② 換言すれば ③ 確かに ④ ただし ⑤ あるいは ⑥ なぜなら

問4 傍線部X「功利主義」・Y「還元主義」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、X 8、Y 9。

(配点6点)

X 功利主義

8

- ① 個人に先立ち社会全体の利益を図ろうとする立場。
- ② 経済的価値のみを行動の規範として重視する立場。
- ③ 得意とする分野でのみ自身の考えを主張する立場。
- ④ 現代の価値観にとらわれ歴史から学習しない立場。
- ⑤ その場の状況や自己の都合で判断・行動する立場。

Y 還元主義

9

- ① 事物の本来あるべき姿の研究に固執し続ける立場。
- ② 複雑な事象を基本的な要素に分解して説明する立場。
- ③ 学問の意義は人々の生活に役立つことだと考える立場。
- ④ 正しい科学の手法は倫理的問題を生まないとする立場。
- ⑤ 事物の構造を通時的な視点から解き明かそうとする立場。

問5

傍線部(1)「ベイトソン親子がそうであったように」とあるが、父親はイギリスの遺伝学者であるウィリアム・ベイトソンである。次の文章を読み、ここで「ベイトソン親子」のエピソードが挿入された目的として最も適当なものを、後の①～⑤の中から選びなさい。

解答番号は、

10。

(配点6点)

ベイトソンは3人の息子たち全員に対し、生物学者になるよう強制し、幼少時から英才教育を施したという。理由は、中産階級の安定した地位を守るには、科学者が最適な職業選択だと考えたから、とされる。しかし最も従順だった長男は、第一次世界大戦に出征して戦死。次男は支配的な父親に反発して生物学を捨て、劇団員になったが(中略)自殺。三男も(中略)生物学を捨て英国を去り南太平洋や東南アジアの滞在を経て、米国に渡った。

(千葉聡『ダーウィンの呪い』より。出題の都合上、一部中略した箇所がある)

- ① 手段が何であるにせよ、教育において子の人生に対する親の過度の介入は避けるべきであると主張するため。
- ② 子が親の意に背いた行動を取ろうものなら、自由と強制の対立が不可避的に生じてしまう現実を伝えるため。
- ③ 親が子の人生を操作しようとする試みは、誰が行おうとも不幸な結果を生む可能性が高いことを伝えるため。
- ④ 過去に見られた親が子の思いを無視して自由を奪う事例が、別の形で現実化しようとしていることを示すため。
- ⑤ 知見豊富な遺伝学者ですら失敗した例を紹介し、専門的知識のない人々の遺伝子改変の危機感を醸成するため。

問6

傍線部(2)「体細胞の遺伝的改変を含む一世代限りの可逆的な方法で進められたほうがよい」とあるが、筆者がこのように主張する根拠として**適当でないもの**を、次の中から選びなさい。

解答番号は、11。

(配点6点)

- ① 生殖に関わる遺伝子への操作は、人間という生物の進化自体に悪影響を与える可能性すらあると考えているから。
- ② 何らかの遺伝的疾患を抱えている人々を将来世代に影響しない形で救うことには、意義があると考えているから。
- ③ 生殖に関わらない細胞の遺伝子改変は、生殖細胞への操作とは異なり何度かのやり直しが効くと考えているから。
- ④ 自由な遺伝的改変は、自他を比較するという人間が根源的に持つ資質を悪質な形で露呈させると考えているから。
- ⑤ 偶然に社会的に恵まれた家庭やそこに生まれた人間だけが、利益を得る社会が実現されてしまうと考えているから。

問7

傍線部(3)「レンガを一つ置いてみる」とあるが、これはどのようなことをたとえた表現か。その説明として最も**適当なもの**を、次の中から選びなさい。

解答番号は、12。

(配点6点)

- ① 最終的に達成したい状況を支える要素の強化や関係する人々との合意のもと、地道な努力を積み重ねること。
- ② 科学や技術が未発達な事案であるなら、すでに確固として存在するものを出発点にすると達成できること。
- ③ 先進的な科学技術を現実的なレベルで適用する際には、その技術の適用範囲のルール決めが重要であること。
- ④ 社会的に論争を生む事案は、誰にでも理解可能な事物を議論の土台として合意を目指すべきだということ。
- ⑤ 科学技術の進化にとって歴史上の失敗を回顧・反省することは、建築物の土台の強化に似ているということ。

問8

次は、本文を読んだ生徒二人の会話の一部である。この会話を読み、空欄 **I** ・ **II** に入るものとして最も適当なものを、次ページの①～⑤の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、**I** **13**、**II** **14**。

(配点8点)

生徒A…本文を通して筆者は「優生学」という考え方を批判的に見ているよね。この本文の引用範囲より前の部分で筆者は「優生学」の歴史を紹介しているけど、「優生学者たちは、優生学を捨てたわけではなかった。ナチスを見て、あわてて悪魔に衣をかぶせて天使に仕立てただけである。」と、ナチスの優生学を批判した学者たちもまた優生学者だったと述べているよ。

生徒B…この表現からも筆者の「優生学」に対する姿勢がうかがえるね。本文でも述べられているように **I** 時代なので、「遺伝」というものに対して真摯な考察が必要だと筆者は考えているんだよ。

生徒A…この本文で筆者は、「遺伝」という概念への **II** な見方を一貫して批判しているのだというまとめかたもできるね。

I

13

- ① 「優生学」的な思想の復権と現実的な実現が主に極右勢力から強く訴えられている
- ② 「優生学」に基づいた高額な遺伝子操作の可能な財が一部の富裕層に偏在している
- ③ 「優生学」が志向した社会が科学技術の発達により部分的には実現可能になっている
- ④ 「優生学」を持ち出すまでもなく遺伝子プールの汚染が解決すべき喫緊の課題である
- ⑤ 「優生学」では考慮の範囲外にあった体細胞の遺伝子改変がすでに可能になっている

II

14

- ① 一義的
- ② 感覚的
- ③ 先験的
- ④ 前時代的
- ⑤ 決定論的

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に 1 ～ 6 の番号を付してある。また、文章中に出てくる外国人名は政治学や歴史学、社会学などの研究者と理解して読み進めること。

1 各国が近代国家システムを構成し、その一単位として加わるかぎりには、国家のサブシステムとしての政府部門も経済部門もある程度までは近似化し、類似していくことは当然の成り行きである。それに加えて現在進行中のグローバル化はますます近似化にハクシヤ^(a)を掛けていく。何しろ、グローバル化は物事を標準化する強い傾向を持っている。メートル法やその他の様々な規格化は近代国家と共に進行し、コンテナや電気製品、コンピューターの規格化を通じて促進されたが、グローバル化はロボットの規格化までも求め、予想しうる範囲を越えて進行させている。それにつれて、政府部門や経済部門のリゼーションはロボットの規格化までも求め、予想しうる範囲を越えて進行させている。それにつれて、政府部門や経済部門のAも一層進行しているのは事実である。しかしながら、国家を一つのシステムと見立てた場合のサブシステムとしての政治や経済は、相互に関連し、連結を保ちながら、じつは文化部門ないし社会部門を媒介として実際に機能していくのであり、外形は同じ制度や仕組みでも、文化、社会部門を媒介として発現し、作用するのであって、それらが機能する可能性や機能の仕方、および持つ意義は国家によって微妙に異なってくる。たとえば二大政党制にしても、世界中でそれが成功しているのはアメリカやイギリス（最近では崩れた）など、^(註)アングロサクソン系の国が多いが、社会的背景の違う国々ではなかなか成功していない。いかにBに望ましいと考えられる原理でも、社会によってそれが育たないところもある。

2 ここで社会部門ないし文化部門としているものを、ブレット・ポウデンは文明と呼んで、ある人間集団の集合的生活に観察される一切の事象を指し、それには人々の物的、知的、道徳的、身体的その他一切の社会的生活がハウセツ^(b)されるとしている。文化はとかく文明と混同して使われがちであるが、文化が文明を創造し、生み出す源泉であるとすれば、文明はその成果ないし産物であるとすることもできる。ポウデンは文明には進歩もあれば退歩もあり、偉大さや美の観点から価値判断の対象ともなるものだとするが、それは文明が文化の成果であるからに他ならない。創造の原理としての文化のうちにはナショナルナティの中に定

着し、それ自体が評価の対象となることもあるが、本格的な価値判断に晒さらされるのはその成果をトータルに纏まとめた文明の方である。グラハム・トンプソンは *Globalization Revisited* (2015) において文化はグローバリゼーションが起こるずっと前に分断されていて、その影響を最も受けづらいものであるとするが、それもその筈はずで、創造の原理としての文化は各国のナショナリティに着床し、包まれたもので、それに抱かれてしか機能しえず、分断されているのが当然である。その成果としての文明はそれとの

C を保ちながらも、その根っこを離れて浮遊し、拡散する。

3

ボウデンの著書名は *The Empire of Civilization* (2009) であるが、そこでいう文明の帝国とは、国別に存在する文化ではなく、それが一つに統合された文明のことである。文明を構成する要素として技術、工芸、思想などについて考えると、それらは太古から融合する可能性があったものであり、実際にある程度交流し、融合していた。大隈重信は第一次世界大戦を経験し、世界平和をもたらすために、東西文明の調和を説いたが、すでに古代から文明は交流し、統合はしないまでも、様々な要素が世界中に拡散し、互いに影響し合っていたと洞察した。

I

それが今日では国民国家の中に定着している文化である。創造の源泉としての文化そのものは国ないし地方に固有なものであって、いかにグローバリゼーションが進行しても、グローバル化されえない。いかに世界的に価値のあるシユギョク（c）の名品も、個人の創造性をつうじてしか生まれないと同じように、世界の文明も各国の文化をつうじてしか創造されなければ進歩していかないというのが事実である。

4

アーネスト・ゲルナーは二人の間人が国を同じくするとされるのは、同じ文化を共有することによってであるとし、その文化とは理念の体系、シンボル、団体および行動とコミュニケーションの様式であるとしている。文化と呼ばれるこれらのルーツは遠い過去から伝承されてきたものの蓄積であり、その認識には想像力を必要とする。そのため、カール・ドイッチもアンソニー・スミスも国民ないしナショナリズムを理解するにはこの文化が重要な役割を果たしていることを強調している。特にスミスはナショナリズムはイデオロギーの問題を越えた文化の問題であるとしている。そして、その文化は原則として国民という共同体のあらゆるメンバーに開かれた、公共的なものでなければならぬとする。国民がその文化的統一性とそれを生み出した国民的歴

史を意識すれば、国民教育や制度をつうじて独特の国民的な性格、味覚、行動の習性、感受性を生み出すことになる。国民は単に過去の伝統の継承者ではなく、おのず自から伝統の形成者でもある。そのためには、人々の間にコミュニケーションが行われ、文化に含まれた価値が人々の間に浸透しなければならぬ。それでも、コミュニケーションの結果として人々の間にコミットメントが行われるのは、ウェーバーが強調しているように、国民一人一人が自分もその一員であることに誇り、尊厳、きようじ矜持を感じなければならぬ。その誇りの気持ちがナショナルリズムの一つの特徴である自他の区別となつて現れるのである。もちろん文化に対するアクセスの違いや、コミュニケーションの度合いの相違によつて、誇りや矜持を持つ度合いは異なってくる。

5 ゲルナーはこのようにして異なる文化が価値の上でも現実の上でもそれ自体の判断基準を持つようになる、他文化との間に溝ができ、(1)非互換性の原則が支配するようになるとする。ナショナルリズムがわれわれと他者とを区別する特徴を持つのはこのようにしてである。だが、デュルケムはそれも事実には違いないが、われわれが部外者に対してまさに異質性の故に親しさを感じることもあるとする。コミュニケーションはその定義上一定の文化ないし地域内に閉じこもっていないものであり、ナショナルリズムを越えて文化がひろ拡がるという現象はその前から、また後にも見られたところであつたので、文化は一方においては国民よりもより小さな単位にその特殊性に合わせて浸透していくと同時に、他方においては国民的単位を飛び出して、グローバルに伝搬されていく可能性はグローバル化の以前からあつた。エルネスト・ルナンは特定の国民的文化の上に人類の文化が支配し、互いに共存していく必要性を認識しなければならぬとしている。その人類の文化こそ、ここでは文明と呼んだものである。その文化が伝搬されて新たな国の創造の原理となるためには、その国のナショナルティの中に取り入れられ、着床し、包まれて、その国固有の文化として育たなければならない。

6 サミュエル・ハンチントンが文明が幾つかに別れ、文明間の衝突が起こることは避けられぬと予測した。現在多発している国際的テロの現状はその正しさを立証するかのようと思われるが、実際はそうではない。欧米の^{キリスト}基督教文明とイスラム世界の回教文明、およびイスラエルのユダヤ教文明は、異なつた文明を形成しつつ発展してきたが、そのルーツはそれぞれ、エホバ、アッ

ラー、ヤハウエを信じる一神教であり、旧約聖書を共にし、共に同じルーツの教えを信奉している。その中で共通して目立つのは、必ずしも教義の中心ではないが、「目には目を、歯には歯を」という教えであり、それが結果的に「目的は手段を正当化する」という考えになり、イスラム教対キリスト教、イスラム教対ユダヤ教の抜き差しならぬ対立となっている。筆者が来日したフィンランドの国会議員団と懇談した際に、イスラム教は団体主義的だという話が出た。たしかに今日起こっている現象を観察すれば、そうと思われる節もある。だがコーランには人間が最後の審判を受ける時には誰の介添えもなく、唯一人神の前に立たされ、生前の行いについて善行と悪行との比較考量を受けなければならないとある。そうであればあながち個人主義は存在しないともいいきれない。だから、**D**、いかに異質な文化であっても、双方が同じ人間であるかぎり、接点となるところが見つかる筈なのである。

(片岡寛光『現代国家論』より。出題の都合上、一部中略・変更した箇所がある)

(注) アングロサクソン系——現代のイギリス人の根幹をなす民族の系統。

問1

傍線部(a)～(c)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 15、(b) 16、(c) 17。

(配点6点)

(a) ハクシヤ
15

- ① 選挙でハクヒョウを投じる。
- ② ハクシンの演技に感動する。
- ③ 城の外壁がハクラクする。
- ④ 新入生をハクシユで迎える。
- ⑤ 軽佻けいちようフハクな態度を戒める。

(b) ホウセツ
16

- ① 各国代表がセツショウを重ねる。
- ② 文章のチセツな表現を書き改める。
- ③ 過去の失敗のセツジヨクを果たす。
- ④ 食物で豊富な栄養をセツシユする。
- ⑤ 宝石のセツトウ犯が連行される。

(c) シユギョク
17

- ① シユザン塾に通い始める。
- ② シユニクをつけて押印する。
- ③ シユセキで卒業を迎える。
- ④ 客人を招きシユエンを催す。
- ⑤ 仮装にシユコウを凝らす。

問2

波線部「ナショナリズムはイデオロギーの問題を越えた文化の問題であるとしている」を文節に分けるといくつになるか。最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、18。

(配点3点)

- ① 7
- ② 8
- ③ 9
- ④ 10
- ⑤ 11

問3

空欄 A } C

解答番号は、A 19、B 20、C 21。

(配点9点)

- ① 演繹的 えんえき
- ② 可塑性
- ③ 恒常性
- ④ 斉一化
- ⑤ 政治的
- ⑥ 精緻化
- ⑦ 統合的
- ⑧ 分極化
- ⑨ 連続性

問4

空欄

I

に入る最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

22

。

(配点4点)

- ① 文明は開化するものではなく、拡散・伝播するものと彼は十分認識していたのだ
- ② 文明が拡散する嚆矢こうしとなるのは、より小さな共同体で継承けいしょうされている伝統である
- ③ いったん文明として受け入れられたものが、各国で独自に受容されるのである
- ④ だがその文明の成果も、世界中の何処どこかに生み出す源泉がなければならなかった
- ⑤ 大隈の洞察が、当時の明治政府の政策に影響を与えたことは歴史が証明している

問5

空欄

D

に入る最も適当な語句を、次の中から選びなさい。

解答番号は、

23

。

(配点3点)

- ① 大手を振れば
- ② 胸襟を開けば
- ③ 腰を据えれば
- ④ 下手に出れば
- ⑤ 宗旨を変えれば

問6

次の文は本文の一部である。どの段落の末尾に入れるのが最も適当か。次の中から選びなさい。

解答番号は、24。

(配点4点)

だから、文明の方はグローバリゼーションが起こるずっと前の古代から世界中を駆け巡っていたのである。

① 1 段落

② 2 段落

③ 3 段落

④ 4 段落

⑤ 5 段落

問7

傍線部(1)「非互換性の原則が支配する」とあるが、これはどのようなことにつながるか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、25。

(配点5点)

- ① 文化は独自性を備えているがゆえに尊重されるものだという理解を、他文化を攻撃する根拠としてしまうこと。
- ② 文明が生じる元となった文化は自国のものと主張することで、他国より優位に立とうとする考えが生じること。
- ③ 文化を異にする者とは理解し合えなくなり、他文化に対する違和感が発端となって文明間に衝突が起きること。
- ④ 異文化を受容する判断基準が、そこに自文化との近似性を感じられるかどうかという点に絞られてしまうこと。
- ⑤ 異なる文化を共有する人々の思考や感情を想像することが軽視され、世界で戦争への緊張が生じてしまうこと。

問8 本文の内容に合致しないものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、26。

(配点6点)

- ① 「世界文明」という単一の存在があるとしても、その源泉は、国や宗教を同じくする人々が共有する伝統にある。
- ② この文章で文明と定義されて論じられているものは、グローバリゼーションの拡大もあり、同質化の傾向にある。
- ③ 表面的には異質な特徴を持ち、あひ、い相容れることのない文明相互でも、根源的には同じ文化を有している場合がある。
- ④ 文化はそれぞれに固有のものであるが、文明という形に昇華した後、他国で受容される可能性が開かれてもいる。
- ⑤ 各国固有の文化は原理的に価値の高低を全く考慮されないが、世界共通のものとなりうる文明は評価対象となる。

問9

二重傍線部「自他の区別となって現れる」とあるが、「自他の区別」はどのような気持ちが見れたものと説明されているか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる内容を、「**伝統の継承や形成**」の語句を用いて句読点を含め50字以上60字以内で書きなさい。

解答は、記述解答用紙に縦書きで記入しなさい。

(配点10点)

の気持ちが見れたもの。